

バンザイア・ニツボニカ

BANSAIA NIPPONICA

A new genus and new species of Japanese spider.

By Toshio Uyemura,

植 村 利 夫

〔東京市瀧野川區西ヶ原町 310〕

日本産のナミハグモ *Cybaeus* 屬として已に記載されてゐるものには *C. Mellottei* (Simon, 1886) 及 *C. striatipes* Boesenberg et Strand, 1906 の 2 種がある。ベーゼンペルヒ及シュトランド兩氏の記述に依ると前者は九州佐賀・横濱及北日本から記録されてゐるし、後者は僅かに♀ 1 頭を北日本から採集されてゐるのみである。其の後前者は各地から新分布地が報告されたが、後者は何れの地からも採集されてゐない。而して予はこゝ數年來所謂ナミハグモとして扱はれてゐる蜘蛛は *C. Mellottei* なりや否やに就て非常な疑問を持つてゐた。其の最も主なる理由は此の蜘蛛が間疣を有しない點にあつたのである。岸田氏の分類體系 (1930) に依ると *Cybaeus* 屬はミヅグモ科 Argironetidae に入れられ、科の特徴として間疣がある事になつてゐるし、外國の専門家の檢索表を見ても全てが *Cybaeus* 屬の特徴として間疣を有する事になつてゐる。爾來予は鬱々として此の蜘蛛を見る度に煩悶を重ねて來たのであるが、昨年秋深澤治男氏が東京市芝公園で採集したるに依つて最近ナミハグモとして扱はれてゐる蜘蛛は果して *C. Mellottei* でない事だけを明確にする事が出來た。それは *C. Mellottei* の♂は觸肢の脛節に大きな突起を有するのであるが、此の蜘蛛の

もはそれを有しない點に於て一見區別し得たのである。これに活氣づいた予は更に一年間この蜘蛛に就て研究を重ね、文獻もあさつてみたが、どうしてもうまく當嵌る屬を見出す事が出来なかつた。依つて此の蜘蛛に就ては暫く匙を投げてゐたのであつたが、今回廣東・武漢三鎮の陷落を祝する沸くが如き歡呼の聲に深く感激した予は、更に精査を重ねた上、つひに此の蜘蛛を新屬新種として發表する事に決心したのである。以下新屬新種の記載をするに先立ち、何が故に此の蜘蛛を新屬と決定するに至つたか其の理由を述べておきたいと思ふ。

### クサグモ科の分類

蜘蛛學の世界的權威シモン (Eugene Simon) 氏の分類體系 (1898) に依るとクサグモ科 Agelenidae は次の4亞科に分けられてゐる。

#### クサグモ科の亞科檢索表

1. 前疣は互に接近し、間疣がある。後疣は前疣の後に位置する。…………… 2
- 前疣は離れてゐる。間疣がない。後疣は明らかに2節よりなる。…………… 3
2. 下顎は著しく傾斜し、頂端は鈍角をなしてゐる。後疣は2節よりなり、  
末節は第一節よりも長い。…………… Nicodaminae
- 下顎は内側に於ては殆ど垂直に近く、頂端は斜に切斷されてゐる。  
…………… Cybaeunae
3. 前疣は僅かしか離れてゐない。後疣は前疣の後に在つて其の間は少し廣  
いに過ぎない。…………… Ageleneae
- 前疣は互に離れてゐる。蛛疣は全部一直線又は孤狀に並んでゐる。  
…………… Hahniae

予は先づ此の疑問の蜘蛛を此の表に依つて檢索してみたのであるが、間疣を有しないから直ちに Ageleneae 又は Hahniae に入つてしまふことになる。而して此の蜘蛛の後疣は一節よりなり前疣よりも短いが故にどうしてもこれ等の亞科に入れることが出来なかつたのである。尙又大體の感じは矢張り *Cybaeus* に似てゐるし、後疣が1節のものと云へば此の檢索表では當然 Cybaeunae に

屬する事になる。そこで次に *Cybaeunae* の群檢索表を訪ねてみる事にした。

#### ナミハグモ亞科の群檢索表

1. 下唇部は長さ幅に著しく優る。…………… 2  
   一下唇部は長さ幅に優らぬか少し優る程度である。…………… *Cybaeae*
2. 下顎は細長く、先端は尖つてゐる。…………… *Desicac*  
   一下顎は幅廣く、先端は尖つてゐない。…………… *Argyronetac*  
   疑問の蜘蛛を此の表に照してみると下唇部の長さは幅と大した變りがないから矢張りナミハグモ群 *Cybaeae* に行く事になる。故に更に進んでナミハグモ群 *Cybaeae* の屬檢索表を譯出してみると次の通りである。

#### ナミハグモ群の屬檢索表

1. 後列眼は殆ど一直線上に並ぶか又は後曲する。…………… 2  
   一後列眼は前曲し、側眼は中眼よりも著しく大きい。…………… 10
2. 上顎の後牙堤には 1 本の齒がある。…………… *Cyriotea*  
   一上顎の後牙堤には齒が列生する。…………… 3
3. 後列眼は強く後曲する。…………… 4  
   一後列眼は殆ど一直線上に並ぶ。…………… 5
4. 眼は 6 個である。…………… *Symposia*  
   一眼は 8 個である。…………… *Myro*
5. 下唇部は長さ幅に優らず、下顎の半分に達しない。額は廣い。後疣は 1 節である。…………… 6  
   一下唇部は長さ幅に優り、下顎の半分以上を越える。後疣は *Phanotea* を除く  
   他は 2 節で、末節は短い。…………… 7
6. 前列眼は互に接近する。…………… *Cybaeolus*  
   一前列中眼と側眼の距離は中眼間の距離よりも廣い。…………… *Cybaeus*
7. 前列眼は大きく、相似た大きさである。後牙堤には 2 本の齒がある。…  
   …………… *Myntles*

- 一前列中眼は側眼より著しく小さい。後牙堤には3—4本の齒がある。… 8
8. 上顎の後牙堤には5本の齒を有する。間疣は明らかに存在する。……  
 ..... *Cedricus*
- 一上顎の後牙堤には3本の齒を有する。間疣はないか又は貧弱である。… 9
9. 眼は全て小さい。後疣は一節より成る。前列中眼と側眼間の距離は中眼間の距離よりも著しく大である。…… *Phanotea*
- 一眼は尋常で、前列中眼は側眼よりも小さく、その間は大して離れてゐない。後疣は2節よりなり、末節は小さい。…… *Rubrius*
10. 前列中眼は側眼の2倍もの大さである。…… *Zoica*
- 一前列中眼は側眼よりも小さい。…… 11
11. 前列中眼は側眼よりあまり大きくはない。下唇部は長さ幅に優る。……  
 ..... *Compostichomma*
- 一前列側眼は中眼よりも著しく大きい。…… *Emmenomma*
- 疑問の蜘蛛を又此の表に依つて調べてみるに、眼は兩列とも殆ど一直線に近く、後牙堤には多數の齒を有するので、自然檢索表の5に入つてゆくわけである。而して此の蜘蛛は下唇部の長さは僅かではあるが幅に優つてゐるし、下顎の半分以上に達する點に於て、どうしても6に進むことが出来なかつた。而して7に進むとすれば、後疣が1節よりなるものは例外としての *Phanotea* より他にないわけであるが、序に7に立寄つてみることにした。すると前列中眼は側眼より小さいので8に進めと信號は下つた。依つて示されるまゝに8にまで進んだのであるが、この時予は思はず膝を敲いて喜んだ。見よ *Cybaeae* に屬する蜘蛛には皆間疣があることと思ひこんでゐたのにこゝに間疣のないものゝあることが明記されてゐるではないか。雀躍した予は愈々最後の頼みとする *Phanotea* に突き進んでみたのであるが、遺憾乍ら多少の差によつて、予は此の蜘蛛を *Phanotea* に屬せしめる事を不可能なりと考へたのである。依つて最後に予は此の蜘蛛を新屬として發表する事に決定したのである。

## 新 属 の 記 載

Genus **Bansaia** gen. nov.

カチドキグモ属 (新稱)

眼の大きさは尋常である。兩列とも一直線上に並び、前列中眼は側眼よりも著しく小さい。前列中眼と側眼との距離は中眼間の距離よりも大きくはない。下顎は内側に於ては先づ平行し、頂端は斜に切斷されてゐるが尖つてはゐない。下唇部は長さ幅に少しく優り、下顎の半分を越えてゐる。上顎の後牙堤には多數の齒を有する。前疣は相近づき、後疣は一節より成る。間疣がない。

本属は *Phanotea* E. Simon, 1896 に極めてよく似てゐるが、眼の大きさが尋常であり、中眼と側眼間の距離は中眼間の距離よりも大でなく、後牙堤に多數の齒を有する點に於て、又後者は下唇部の長さ幅に著しく優つてゐるが本属は少しく優るに過ぎない點に於て異つてゐる。亦 *Cybaeus* L. Koch, 1868 及び *Cybaeolus* E. Simon, 1884 とは間疣を有しない點に於て明らかに區別する事が出来る。

模式標本 *Bansaia nipponica* sp. nov.

## Resumo

Genus **Bansaia** gen. nov.

Oculi normales. Oculorum linea subrecta. Oculi medii antici lateralibus multo minores, medii antici et postici a lateralibus quam inter se haud remotiores. Laminae subrectae intus ad apicem oblique truncate sed apice non acuminatae. Pars labialis vix longior quam latior et dimidium laminarum superans. Chelarum margo inferior multi dentatus. Mamillae inferiores inter subcontiguae, superiores uniarticulatae. Colulus nullus.

A *Phanotea* E. Simon, 1896 differt oculis normales, oculi medii antici et postici a lateralibus quam inter se haud remotiores, chelarum margine inferiore multi dentatus, pars labialis vix longior quam latior et dimidium

laminarum superans. A. *Cybaeus* L. Koch, 1868 et *Cybaeolus* E. Simon 1884 differt colulus nullus.

Typus : *Bansaia nipponica* sp. nov.

## 新 種 の 記 載

### *Bansaia nipponica* sp. nov

カチドキグモ (新稱)

**模式標本** (Type specimen) 1937年11月深澤治男氏が東京市芝公園にて採集した成♀を holotype, 成♂を allotype とし, 1936年11月高島春雄氏が伊豆天城山にて採集した成♀1頭を morphotype, 1931年10月予が和歌山縣にて採集した成♀2頭, 1935年9月藤田衛氏が福井縣にて採集した成♀1頭, 1933年1月予が東京市江古田にて採集した成♀1頭, 1937年8月八木沼健夫氏が大阪府下にて採集した亞成の♀♂各1頭を paratype として記載する事にする。holotype 及 allotype は著者の標本 No. 616, morphotype は同 No. 617, paratype 中和歌山縣産のものは同 No. 41 江古田産のものは No. 685 として保存し, 他は藤田衛氏及八木沼健夫氏に保管を願ふことにする。學名及和名は戦勝日本の勝鬨の中に此の蜘蛛を記載した事を記念したものである。

**圖版説明** Plate 12. allotype (♂) の背面全形圖 (dorsal surface) Plate 13. a. morphotype (♀) の背面全形圖 (dorsal surface) b. 同眼の配列 (eyegroup) c. 同頭胸部下面 (ventral surface of cephalothorax) d. 同上顎 (chelicera) e. 同性域 (epigynum) f. 同歩脚の爪 (claw of leg) g. 同觸肢の爪 (claw of palpus)

**測 定** holotype (成♀) は體長 9.5 mm. 頭胸部は長さ 4.5 mm 幅 3 mm. 腹部は長さ 5 mm. 幅 3.2 mm. morphotype (成♀) は體長 10.5 mm. 頭胸部は長さ 4.5 mm. 幅 3 mm. 腹部は長さ 6.5 mm. 幅 4.5 mm. に達する。此の中後者は産卵間近のものらしく極めて肥大してゐたので, 前者に比較すると一見別種かと思はれる程歩脚が短く見えた。測定の結果は矢張り體長に於て優つてゐる

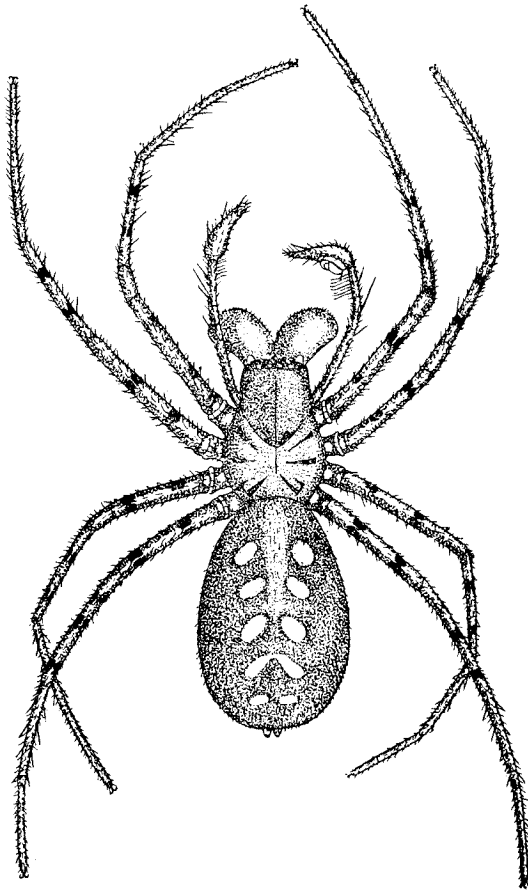
後者の方が歩脚の長さに於て劣つてゐた。表中括弧外は holotype, 括弧内は morphotype の測定である。單位は mm. である。

節 肢	全 長	腿 節	膝 十 脛	跗 節	跖 節
觸 肢	6.1 (5.0)	2.0 (1.5)	2.3 (1.7)	—	1.8 (1.6)
第 1 歩 脚	14.3 (11.9)	4.0 (3.4)	5.0 (3.9)	3.2 (2.6)	2.3 (2.0)
第 2 歩 脚	14.3 (11.9)	4.0 (3.4)	5.0 (3.9)	3.0 (2.6)	2.3 (2.0)
第 3 歩 脚	12.3 (10.8)	3.5 (3.0)	4.0 (3.4)	3.0 (2.6)	1.8 (1.5)
第 4 歩 脚	15.0 (12.3)	4.0 (3.5)	5.0 (4.0)	4.0 (3.0)	2.0 (1.8)

尙 paratype である和歌山縣産の標本は2頭共に體長8mm. で完全な成♀であるから大さには随分變化があるものと思はれる。同じく paratype の江古田産及福井縣産の標本は體長10mm. である。又 holotype の♂は測定の結果♀と殆ど同一である。大阪府の標本は何れも亞成體であるから測定は略する。

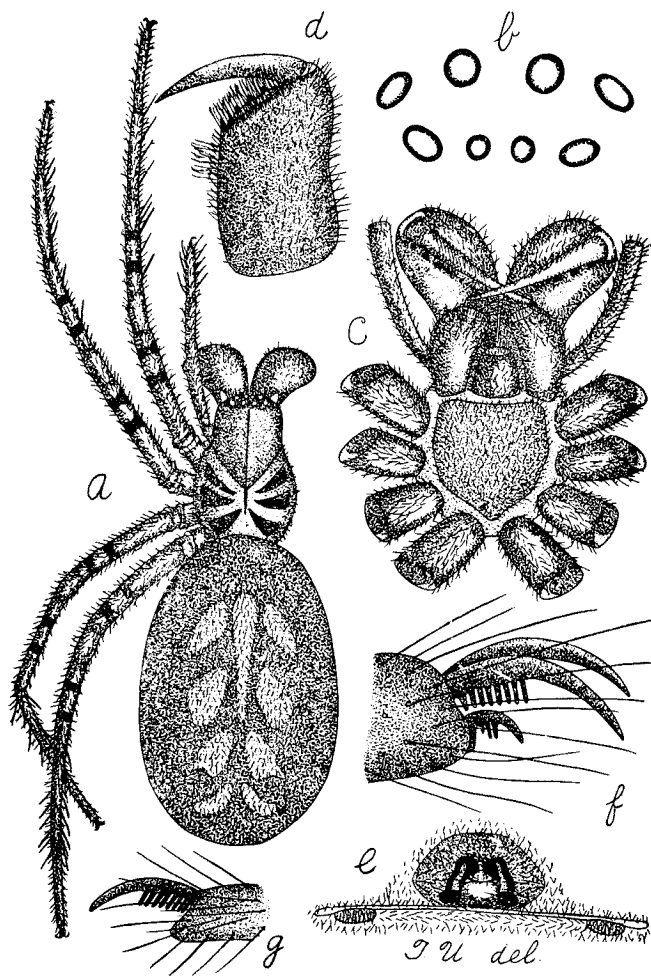
色 彩 成♀ (holotype) 背甲は灰褐色で頭部は褐色強く、放射溝及頸溝の上にある1對の斑紋は黑色である。上顎は黒褐色、下顎及下唇部は濃い褐色で先端の部分は白い。觸肢及歩脚は何れも褐黄色であるが、歩脚の腿節及脛節には各2個の、跗節の先端には1個の淡黑色の環紋がある。但し腿節の中央部のは上面にまでまはつて居ない。何れも下面より見た時の方が明瞭である。爪は黒褐色。胸板は褐黄色で基節よりも幾分か黒ずんでゐる。眼の色は中性であるが直眼は稍黒い。

腹部上面は灰黑色で淡い心臟斑の左右に上面から見る時5對の灰白色の斑紋がハの字狀に並んでゐる。其の後方にも同様な小さな斑紋が2—3對並んでゐるが、上からは目立たない。腹部下面の中央部は濃い灰色で、其の左右兩側は



*Bansaia nipponica* sp. nov. (allotype)  
(Toshio Uyemura del.)





*Bansaiia nipponica* sp. nov. (morphotype)

稍明るく黄色味を帯び、側面に移るに従つて此の色彩は背面の黒色に近い色彩と交錯して縞狀を呈して居る。性域は紅褐色、其の周圍は黃褐色である。蛛疣は淡黃褐色で、其の基部は褐色である。

型模式標本 (morphotype) は背甲褐黄色で頭部は褐色強く、胸部は灰黄色に近く中央に縦の濃褐色の細い斑紋がある。放射溝は灰黒色、胸板は褐黄色、上顎は濃褐色である。下顎及下唇部も上顎の色彩に似てゐるが、先端の部分は白色を呈してゐる。觸肢及歩脚は何れも黃褐色であるが、膝節以下は褐色が優つて居る。各歩脚の腿節及脛節には各2個の灰綠色の斑紋があつて、腿節の方は下面から見る時特に明瞭である。爪は黒褐色。

腹部の地は灰綠色で、淡い灰黄色の心臓斑の左右に稍濃い灰黄色の斑紋が4對ハの字狀に並び、其の後方に小さな同様の斑紋が矢張り對をなして數對あるが目立たない。腹部背面から下面に移るに従ひ次第に色が淡くなつてハの字狀の斑紋と同様な色彩になり、特に記すべき色彩がない。性域は褐色で、胃外溝左右兩翼の下面には横卵形褐色の部分がある。蛛疣の基部は白色で前面は灰褐色を呈してゐる。

holotype と morphotype の色彩の相違中最も主要なる點は、(1) 前者の腹部は黒褐色であるが後者のそれは灰黃綠色である點、(2) 前者は腹部下面の中央に幅の廣い縦の黒褐色の彩色があるが、後者は全體的に黄色で何らの彩色を有しない點にある。

江古田産の標本は holotype 型で全體的に色彩がずつと濃厚であり、福井縣産の標本は其の中間位である。又和歌山縣産の標本は morphotype に類似してゐるが、腹部は灰綠色でなくてむしろ黄色に近く、大阪府産の標本は背面稍黒ずんでゐるが腹部下面に彩色のない點に於て morphotype 型と云ふべきである。

形 態 成♀ (holotype) は背甲長さ幅よりも大で、第3第4歩脚の間は最も幅が廣い。頭部は胸部よりも高く、中窩及放射溝は明瞭である。眼は2列

に並び、直眼は最小で約其の1直徑だけ距る。間眼は何れも其の直徑は直眼の2倍位あり、第2第3間眼は殆ど一直線上に並んでゐる。直眼と第1間眼（前列側眼）との距離は直眼の半徑に等しく、第3間眼（後列中眼）相互の距りは第1及第2間眼への距離と殆ど相等しく、第3間眼の約1直徑距る。第1第2間眼間の距離は第1第3間眼間の距離の約半分である。

上顎は背甲の長さの約 $\frac{1}{3}$ あり、斜前方に突出し、外腭を有する。前牙堤には長毛を列生して居る。後牙堤には3本の大きな齒と4—5本の小齒が列生してゐる。下顎は長さ幅の約2倍もあり、上方に於て多少内方に曲つて居る。下唇部は上邊が下邊よりも稍短い梯形で、高さは幅よりも稍大きく、下顎の半分よりも稍長い。

觸肢は末節に十數本の長い剛毛があり、先端に齒のある爪を1本持つて居る。歩脚先端には何れも3本の爪があり、夫々中央部以下に齒を持つて居る。

第1第2第4歩脚は脛節及蹠節に、第3歩脚は蹠節にのみ剛毛があり、第1及第2歩脚のそれは殆ど對をなして居るが、第3第4のそれは不規則に並んで居る。

胸板は五角形、腹部は卵形、胃外溝は明瞭である。蛛疣は前疣最も長く、後疣の方が少し短い。何れも單節である。間疣を有しない。

成♂ (allotype) は觸肢膝節の上面先端に近く長大な刺毛を有し、腿節・跗節にも夫々小數の刺毛を有する。脛節下面には細長い數本の感覺毛がある。脛節には突起を有しない。他の形状は♀と同様である。

morphotype 及 paratype は holotype と較べて形態上特に記すべき相違を認めないから記載は略する。

### 分類上の位置

最後に新屬 *Bansaia* の分類上の位置に就て附記しておきたい。前記した検索表に依つて明らかなる様にシモン氏の分類體系に依れば此の蜘蛛は明らかに *Agelenidae* → *Cybaeinae* → *Cybaeae* の *Phanotea* に隣して位置すべきもので

ある。然して本邦に於ては蜘蛛の分類は大抵岸田久吉氏の體系(1930)に準據してゐるやうであるが、其の場合は矢張り *Argyronetidae* に屬せしむべきであると思ふ。何となれば岸田氏の體系に於て云ふ所の *Argyronetidae* はシモン氏の *Nicodaminae*, *Cybaeunae* の兩者を總合したものであるか、或は單に *Cybaeunae* のみを扱つたかの何れかであるからである。而も何れにしても *Bansaia* はシモン氏の *Cybaeunae* に屬する以上岸田氏の *Argyronetidae* に屬せしむべきである事は明確である。

此所に於て注意を要する事は前述したやうに *Cybaeunae* 中には間疣を有しなかつたり又有つても極めて貧弱なものとして *Phanotea*, *Rubrius* の2屬が己に知られてゐた所へこんど又 *Bansaia* が加はつた以上、間疣を有しないと云ふ點を分類上の最も重要な標徴にする事はどうかと思ふ。予は蓋し蛛疣殊に後疣の長短・有節無節又は其の並び方によつて *Agelenidae* を幾つかに分つ方がよいのではないかと思ふ。何れ此の點に就ては改めて予の意見を發表する算りであるが、不取敢新屬 *Bansaia* は *Argyronetidae* → *Cybaeunae* → *Cybaeae* 中に屬するものとして扱つておきたいと思ふ。

## 備 考

新屬新種カチドキグモを記載するに當り、予は和歌山縣・福井縣及大阪府より己に發表されてゐる所のナミハグモ *Cybaeus Mellottei* の標本を精査した所、何れも上記の如く *Bansaia nipponica* である事が確定された。依つて此所に予の發表した記録を訂正すると同時に、甚だ潜越乍ら藤田・八木沼兩氏の記録をも併せて訂正さしていただく事にする。それは下記の3論文である。最後に標本の拜借を願つた藤田・八木沼兩氏に謹しんで感謝の意を表する。

- (1) 和歌山縣產蜘蛛目録: *Acta Arachnol.* Vol. 1, No. 3 (1936) …植村 利夫
- (2) 福井縣の蜘蛛: 福井縣博物學會々報 No. 3 (1936) …藤田 衛
- (3) 大阪府產蜘蛛目録: *Acta Arachnol.* Vol. 3, No. 1, (1938) …八木沼健夫

(昭和13年明治節 皇軍漢口入城の日擲筆)